フードシステム

ジャージー種酪農による多様性への挑戦

全国的にも高品質牛乳への関心が高まるなかで、ホルスタイン種の牛乳より濃厚なジャージー牛乳が注目を集めている。ジャージー種は英仏海峡の小島ジャージー島で数百年間にわたり乳牛として改良が重ねられてきた品種で、英国王室の牛乳としても知られている。

しかし、ジャージー種による酪農はホルスタイン種に比べ生産性が劣るため、酪農経営としてみた場合、極めて厳しいという現実がある。

一．ジャージー種による酪農の課題

㈠経済性・効率性の観点では困難

ジャージー種による酪農経営は乳量、成牛となる飼養期間、雄仔牛価格等の面でホルスタイン種に劣り、酪農農家の経営を安定させることは容易ではない。ホルスタイン種の泌乳量の半分ほどで、酪農経営という面からは非常に厳しいものがある。

酪農は、乳牛から生み出される生乳の販売だけでは成り立たない。それを補完するのが雄仔牛の販売や肥育等である。しかしジャージー種の場合、ホルスタイン種に比べても、仔牛価格や成牛の価格が極端に低く、収入の源泉とならないという現実もある。

㈡生産面での施策の偏重

現在の酪農・乳業政策はホルスタイン種を前提に組み立てられており、地域の特色ある畜産を育成する観点が不足している。経済性という面ではホルスタイン種が優れており、劣後する品種は淘汰されるという構造になっている。

実需者の評価は高くニーズも強いが、消費者も価格差を負担してまで購入するには、一定の限度がある。このため、地域の特徴ある取組みは定着しないという難点を持つ。

㈢需給バランスと余乳処理

冬場は牛乳の需要が落ち、需給が均衡しないため、余乳処理が必要になる。余乳は粉乳に加工しているが、ジャージー牛の生乳で粉乳をつくったのでは全くコスト的にあわないという課題がある。

冬場の余乳処理で赤字になるため、もっと増頭したくても、生産を抑制せざるをえないという課題がある。実需は強く、全国的にもジャージー牛乳を供給できる産地は極めて限られているにもかかわらず、需給のマッチングがはかられていない。

二．多様な観点からジャージー種の振興

㈠中山間地域の酪農振興

A地域では、中山間地域の畜産振興をはかる観点から導入された。ジャージー乳牛の導入は、地域の酪農農家の組織である酪農振興会が中心となって進めてきた。ジャージー乳牛は小型で粗食に耐え原野でも飼いやすく、起伏にとんだ地勢に適合する畜種として増頭されてきた。

同地域の酪農はジャージーで発足し、地域の連携によってジャージー種による酪農を維持し、安定供給に寄与してきた。

㈡地域特産化への取組み

B酪農協では、組合創設当時からジャージー乳の加工・販売を手がけており、市乳加工施設やチーズ加工施設等を建設し、積極的に加工事業の展開をはかってきた。現在、ジャージー牛乳のほかに、カフェオレ、ヨーグルト、アイスクリーム、カマンベールチーズ、ゴーダチーズ等多彩な品目に及ぶ。また乳製品製造の見学や体験もできる消費者交流型のふれあい施設も開設し、酪農の三次産業化にも取り組んでいる。

三．地域に軸足をおいた酪農振興

ジャージー乳牛は、特徴ある畜産物が少ない中にあって、実需者の注目度は年々高まっている。しかしホルスタイン種に比べ乳量が劣り、経済性・効率性の観点では、ジャージー種の酪農農家の経営が成り立たない。このため、地域の生産者団体等が独自にジャージー乳の乳価体系をつくり、酪農農家の再生産を支えているのが実情である。この点地域に軸足をおいた酪農振興と多様性への挑戦を支える施策が求められる。

（鴻巣　正）